

瀬戸内アートの旅（高井ゼミナール合宿記）

国際日本学部 国際文化交流学科 高井ゼミナール1期生
石塚あかり、酒井那実、土田果歩、春田菜々美、渡辺真由

はじめに

文化観光について研究する高井ゼミナールでは、座学とフィールドワークを組み合わせた活動を行っている。座学としての文献講読で2022年度前期に使用した文献は『観光のレッスン―ツーリズム・リテラシー入門』（山口誠・須永和博・鈴木涼太郎著、新曜社、2021年）である。「自由になるための技能（リベラル・アーツ）」としての観光の可能性を問う同書では、観光の理論と各地の事例が紹介されているが、そのなかで香川県・直島を事例としたアート・ツーリズムについて学んだ。

アート・ツーリズムとは、地域性に根差した芸術作品をめぐることによってアートと地域文化への理解を深める観光のあり方である。アートが媒介となつて生じる多様なモビリティと社会変化を実際に「観る」べく、ゼミ合宿で香川県を訪れた。当初の予定は直島と豊島に1泊ずつするということもなかった。それが実現しないことになろうとは、出発時の私たちは知る由もなかったのだが。

ゼミ合宿の計画立案から手配まで

ゼミ合宿の目的は「観光は現場で起きている！

文献で学んだことを現地で実際に見て、聞いて、触れて、嗅いで、感じてみよう。そして、もう一度、言語化してみよう」である。高井先生から提示されたのは、この「目的」、そして

1. 合宿期間は9/5～9/10のうちの2泊3日
2. 行先は瀬戸内海の直島など
3. 合宿の全体計画を立てて旅行の手配を行い、合宿のしおりを作ること
4. 合宿後にフォトブックを作ること、である。

その他の細かい目的地や移動手段、宿泊先などの旅程はゼミ生自身が試行錯誤しつつ組み立てた。

旅程を立てている段階で「これが最善」と考えて決めた行程が、いざゼミ合宿の当日となると、台風の影響により直島へ向かうフェリーが欠航するなど、当初の行程案と大きくズレが生じ、様々なハプニングに見舞われた。しかし、実際にゼミ合宿を終えて感じたことは、もし当初の予定通りに旅が進んでいたとしたら、私たちは心身ともに疲労しきっていただろうということである（元の旅程には余裕がなく、アクティビティを詰め込み過ぎていたのだ）。

また、直島航路が欠航したために止む無く泊ま

ることになった高松市内のゲストハウスで出会った宿のご主人とご家族や他の旅人との交流は、台風による欠航というトラブルがなければ得られないものだった。私たちは合宿を通して、旅は余裕をもつてするものであること、旅にアクシデントはつきものだが、それもまた旅の良さなのだ、ということを学ぶことができた。

産廃の島からアートの島へ、豊島で感じ考えたこと

台風の影響が去り、合宿2日目にフェリーで上陸がかなった豊島は、かつて日本最大級の産業廃棄物不法投棄事件の舞台となった島である。事件の発端は豊島総合観光開発株式会社が1975年に香川県知事に許可申請を行った有害産業廃棄物処理場建設であった。広大な処理場には、廃油、製紙汚泥、シュレッダーダストなどの産業廃棄物が野積みになり、連日野焼きが行われ、島の子どもたちはぜんそくなどの健康被害に悩まされた。住民は香川県の責任を認めさせ現状回復を求める国の公害調停を申請、長年にわたる住民の闘いの結果、ようやく2000年に香川県と住民とのあいだで調停が成立した。産業廃棄物の島外搬出が

2019年に完了したあともなお、汚染水浄化などの原状回復の試みが続いている。

その豊島は、2010年瀬戸内国際芸術祭の会場に選定され、直島に次いで2番目に来場者数が多い「アートの島」としての顔も今は併せ持っている。豊島で、私たちは多種多様な芸術作品に触れた。特に豊島美術館では、忘れがたい「非日常」空間を体験した。豊島美術館は、世界的に有名な内藤礼氏がデザインした「母型」という大きなドーム状の建物を主作品としており、来館者はその建物内部の至る所から湧き出る「泉」の音とともに、静寂な空間で自然と融合する感覚を味わえる。コンクリート状で極めてシンプルな構造の「母型」内で、私たちは座って瞑想したり、寝転んで天井を見つめたりと、各々好きなように過ごした。気づけば2時間ほどの時間が過ぎていた。

水の音、鳥の囀り、木々の揺れる音など、普段よく意識しないと耳を傾けることのない自然音が鮮明に聴こえた。また、母型内では人がたてる音がよく響き、人工的な音が不自然に感じるほどであった。産業廃棄物によって苦しめられてきた島につくられた美術館での、この斬新かつ素朴なアート体験から、人間は自然のサイクルの中で常に生かされており、美術作品と同じように繊細な自然を尊重し、保護しなければならないという想いが芽生えた。

「母型」内部は撮影禁止のため、ここで内部画像を紹介できないのが残念でならない。関心を持った方は是非訪れてほしい。



豊島美術館「母型」の外観：ドーム型の母型の上半分が地上に顔を出している。内部は広大な空間となっている。

また、瀬戸内国際芸術祭作品の1つである「海を夢見る人々の場所」がある甲生海岸を訪れ、その作品名の如く、私たちは豊島から見る海の美しさに心奪われた。下の写真は、その際撮った集合写真である。私たちは同日の夜にもこの場所を訪れ、幻想的な海を満天の星空の下で眺めるという特別な体験をし、甲生海岸は私たちにとても思い出深い場所となった。



再び訪れた、夜の甲生海岸



豊島の「海を夢見る人々の場所」にて 瀬戸内国際芸術祭 2022 の出展作品 No. te19 オーストラリアを代表する現代美術家と建築家のユニットによる作品

香川の名物「うどん」

香川県といえば多くの人が「うどん」を連想するだろう。讃岐うどんの歴史は長く、讃岐で生まれた弘法太師空海が1200年前に中国から持ち帰ったのがその始まりと言われている。さらに、讃岐の気候はうどん作りに適しており、うどん作りが当時から盛んであったことから全国的に有名になっていった。ゼミ合宿では、食の目的として「香川のうどん」を食べることを決めており、3日間で計4回うどんを食した。朝うどん、昼うどん、夜うどん、うどん三昧の日々である。

最終日に訪れた「中野うどん学校」（うどん体験施設）では、実際にうどん作りを体験し、楽しく作りながらも、うどん作りの技術の高さを実感した。「食」は旅において最も大切な要素の1つだが、ただ食べるだけではなく、実際に「つくる」ところから体験することを通して、香川の人々が大切に守ってきた「うどん文化」を多面的に理解する一助となったように思う。



中野うどん学校にて、「私の作ったうどんです」とうどんを手を持っているゼミ長

全体を通して

二泊三日の合宿を通して、実際に見て、聞いて、触れて、嗅いで、感じたことで「観光は現場で起きている」という意味について各々が考え、身をもって感じる事ができた。ゼミ合宿に至るまでの時間は容易では無かったが、チームで協力しあうことで関係をより深めることができ、今後も切磋琢磨し、お互いを高めあうことができる大切な仲間となった。また、ゼミ合宿中お世話になった人々と過ごした温かい時間は、私達にどこか懐かしい気持ちを思い出させ、そこで眺めた美しい自然は一生忘れることのできない特別な場所となった。

社会に出て働くことについて考え、そのための選択が迫られる私達にとって、大学3年生のこの時期に、言語化できない美しさ、温もりに触れることができたことは、人生の中で非常に幸運な経験であった。

そして、お土産として持って帰ってきた「気づき、学び、疑問」によって、後期のゼミナールでは、より深い議論を交わすことができるようになったと実感している。大学4年間の集大成である卒業研究にもまた、この経験を最大限に活かしていきたい。